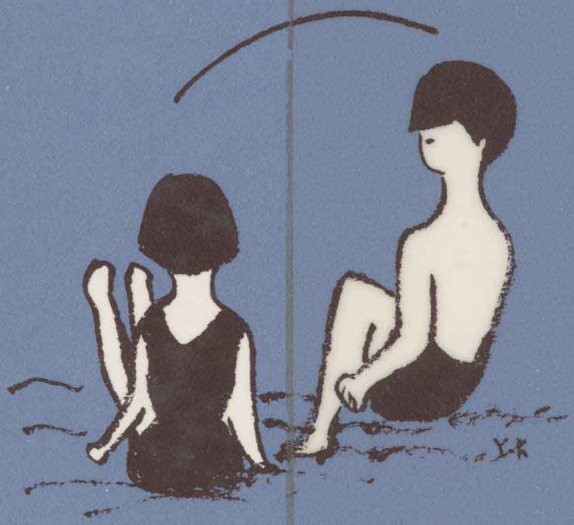
詩文集

手紙

小林陽子



日本図書刊行会

手　　紙

1986年6月20日　第1刷

著　者　小林陽子（こばやしようこ）
発行者　福沢美千子
発行所　日本図書刊行会
〒151　東京都文京区音羽1-15-12東急ドエル・アルス音羽313
(03)945-6361　郵便振替東京1-92065
定　価　1,500円
印刷所　三幸印刷株式会社
製本所　小泉製本所
©1986 Printed in Japan

詩文集

手紙

小林陽子

日本図書刊行会

手

紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章

ろう細工　9
我子　10
夜更け　11
耐え忍ぶ　12
少年よ（道）　13
よし子ちゃんの風船　14
古里　15
一本の木　16
乳母車　17
衣替え　18
初恋　18
ふらみんごのうた　20
白菊の想い出（少女時代）　21
あきらめの花びら咲く物語　22
栄生駅から　23
一枚の葉　24
家　24
イラスト　25

第二章

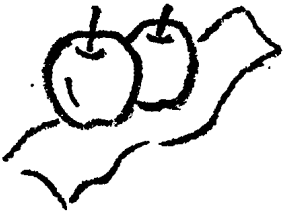
うさぎ　29
手紙　30
乗せる　31
刺す　32
根無草　33
葉無草　34
枝無草　35
生気　36
イラスト　37
拭いている涙　39
玉梓（薬草）　40
人形　41

生まれ変わる　42
速達　43
行きすぎた春（マーガレットを持つ女）　44
妹　46
藍　47
小詩集（あだむといぶ）　49

第三章

月の寄祭は　59
観客　60
日曜日　62
パントマイムに似た世界　63
湖畔の宿にて　64
夜汽車　65
大地　66
イラスト　67
どぶねずみの灯　69
貝殻草の唄　70
ロダンの彫刻　71
僕の鍵盤　72
眼鏡　73
海の量（かさ）　74
乙女の像　75
一欠片　76
みち（あめのなかのおんな）　77
リメンバー　78
空腹　81
蝮の骨　83
メルヘン詩集（竹取物語）　85
あとがき　88

第一章



ろう細工

夏の想い出が
ほんの少しでも片付けられたなら
冷やかな気配の中に
のめり込んでいってもいいのだけれど
だらしなく水着を脱ぎっぱなしの
わたしは
まだ秋をむかえるわけにはいかないと
熱い紅茶をほんの少しだけ口にふくんで
器をもどすと
「でももう秋だから……」
といって
あなたはさも満足そうに流し込む
いつもなら
たわいのないわたしの言葉を
ていねいにつくろってくれるはずなのに

今日のあなたの心の中には
ほどけない結び目が一杯あって
ウィンドウの中の
ろう細工のような虚しさが
こぼれはじめる
危い橋をわたりながら
着ているものを一枚一枚脱ぎ捨てて
とうとう裸のまま
ここまできてしまったわたしなのに
それでもあなたは
「裸はいやよ」
といって
はずしていた貝ガラボタンさえ
閉じてしまって
もう秋風の中を歩いている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

我　子

二つとならない小さな命が
夢も何もなかった私に
生きる勇気をあたえてくれた
そんなこととは少しも知らず
毎日無邪気なこと
わけが分かるようになって
父のことを聞いたら
二人で優しいお父さんさがそうね
といおう
成長して
やはり父のことを聞いたら
私のあやまちを
すべて話そう
我子のいることが
この世の大きな未練となった今

はっきりと知る
人は愛によって生きるのだ
どんなささいな愛でも愛があれば
人は生きる努力をするのだと
私は今
我子によって生かされている
この世に誕生して
二回目の冬を迎えようとしている我子
知ってほしい
もっときびしい冬があることを

夜更け

子供のように
時々ダダをこねたくなる私が
子供をつれて海へ行く
何と可笑しな親子だろう
海のような広い心になりたいと
海のように逞しく育ってくれと
ひたすら願いながら
夜更けはときおり
白い堤防に立つ
離婚して二年間
育児に専念し
何とか自活する道をと
洋裁を習い始めて八ヶ月
洋裁の腕は上がったけれど
私の心はいら立つばかり

夜更けの海は静かで暗い
波打つ私の心
あと何年かかるだろう
臆病な私が
あの島の灯りを
しげしげと見つめることができるのは
たとえ何年かかっても
私は歩きつづける
自分に打ち克つために

耐え忍ぶ

美しく哀しく
くすんだ枯木は我身と共に
耐え忍ぶ

さすらい色の空は厳しく見守り
やがて来る春に
祈りをこめる

たとえ落倍の身であったとしても
我子への愛を保ちつづける中に
やがて開ける道を信じて

雲の流れは時を刻む祈り
すべてに幸あれ
すべてに幸あれ

美しく悲しく
くすんだ枯木は
我身とともに耐え忍ぶ

少年よ（道）

少年よ
私はあなたに仮面など渡しはしない
たとえそれが笑いの面であったとしても
やがて逞しく成長したあなたの笑いが偽物で
　あってはならぬからだ
理由のないハッタリや誤魔化しの人生を歩ん
　でほしくないからだ
人は真実に笑い　嘆き　苦しみ生きていかな
　ければならない
少年よ
いつかあなたが愛する人の太陽になりえたと
　き
あなたはあなた自身の幸福を願ってはならな
　い
愛する人の幸福をどこまでも願ってまっすぐ
　歩きつづければよいのだ
それがあなたに与えられた一つの道であるの
　だと信じて
少年よ
優しいあなたよ
あなたはあなた自身の道をはずれてはならな
　い
道をはずれないために神仏を拝め
幾年月かかろうと必らず良い結果をもたらし
　てくれるのが神仏であるからだ
少年よ
かけがえのないあなたよ
私があなたに出来ることはただ一つ
あなたの幸福を願ってまっすぐ歩きつづける
　ことだけなのだ
それが母である
私の道なのだから

紙

手

よし子ちやんの風船

私と同じ年に生まれたよし子ちゃんは
生まれてまもなく
一生のうちで流す涙を
一晩でつかってしまったのだ
けれどその逝ってしまった顔は
白い京人形のように
やすらかな微笑をかくしきれないでいたとい
う

よし子ちゃんの着ていたチョッキは
赤い花がらの座蒲団になって
よし子ちゃんの家で明るく咲いていた
おばさんは決して涙を流さない人だったが
よし子ちゃんのことを話すとき
心の中にはよし子ちゃんのおいていった涙が
一杯つまっていて
いまにもあふれそうだった

私の幼い日のことだった
おばさんのそんな心の中を見たときから
私は母からもらった大切な風船が
手からはなれてしまっても少しも悲しくはな
かった
天国でよし子ちゃんがきっと受けとめてくれ
ると思ったからだ

生れて逝って　そして初めて風船を手にした
よし子ちゃんは
白い京人形のような顔をして
黒い瞳をパチクリさせていただろうか

古里

馴染んだ古里を出る時には私が私であるべき明るさやときめきを確かに持って出たつもりなのだがやがて気付いて見ると古里のどこかに置忘れてきたに違いないと思うのだ

それでこの間古里をたずねた折に昔歩いた懐しい道を歩いて見たのだがさながら見つからないのは山間の小さな村の地を占領するように横たわっている大川の流れの底にひっそりと身を埋めているためなのだろうか

その川の上にもあるべきものがないのだあんなに頑丈な橋だったのに両岸に置き去りにされた古びた欄杆がそそり泣きながら空虚な思いで天を見上げていたのだ村では新しい橋が建設される

思いおこせば郷愁の風の中にどっぷりとつかろうとした私の年がまだ早すぎたのだろうか

それにしても私は捜さなければならない私が私であるべき明るさやときめきに代わる何かを

でなければ私は古里さえも失くしてしまう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com